

## 編集後記

前号は殆どの作品に3・11が直接反映していた。今号には、例えば「民主政権」の腐敗や「自公政権」の復活が直接反映しているようなことはない。しかし、人民の貧困化や資本主義的価値観に対する抗いが見え隠れしている。

齊藤金藏の詩「飛翔」は、労働者が使い捨てられる現状を書いている。「夢の文学学校生活」というオチがつく。宮部和子「座敷ワラシの棲む家」は孤立する精神の不安を描いているが、それは現代日本の不安そのものであるかのようだ。

学校のイジメや、スポーツ界の暴力体質が報道されるようになった。暴力支配で試合に勝利する組織を作り上げる指導者が優秀だと評価され続けてきた。こうしたスポーツ界の体質が生んだ金メダリストが強姦犯罪を犯した。指導者と若い選手との関係が歪んでいる。暴力が横行し、性的関係に至る場合も少なくないと発表された。「これが日本だ。わたしの国だ」東京オリンピックなんて片腹痛いわ！

スポーツ界だけではない。企業においては、ハラズメントで「成果」を上げさせる成果主義がまかり通っている。

アイドルの丸刈りっていったい何だ。異常な光景だ。ファンが恋愛しないアイドルを本当に求めているなら、そいつらは狂っている。アイドルを商品としてしか見ないプロダクションも、暴力支配するスポーツ界と同質だ。

中国の大気汚染は周辺国にまで及んでいるが、「白猫でも黒猫でも」金儲け出来りやいいという発想が、地球を亡ぼそ

うとしている。革命を忘れた共産党が「海洋大国」って、アメリカを模倣して恥ずかしいと思わないのか。

東電はまったく腐りきっている。嘘を嘘で固めて既得権益から手を離さない。次々と嘘がばれても東電幹部は恥と思わないのだろうか？ 恥知らずの奴らのために電気代金上げられ、あまつさえ国税が使われているのだ。

文学学校はいつも岐路に立っている。長年使わせていただいた根拠地「市民文化センター」から撤退しなければならなくなった。四月から新たな船出が始まる。せいぜい沈没しないようにがんばりましょう。

韓国の若い人気作家キム・ヨンスはこう言う。人と人との間には深く暗い深淵がある。越えることの出来ないこの深淵の向こうに向かって話しかけるが、言葉はむなく深淵に落ちていく。しかし、その深淵に落ちた無数の言葉が「私」を小説家にしていく。

書く意味とは何か？ 生きる価値とは何か。文学学校はいつもそんなことを考えている。

いつまで寒いのか。北風も強いし、花粉も飛び、近眼なのに老眼が悪化して近くも遠くも見えない。おやしなに冷え性で手足が冷たい。これではNK細胞も元気が出ない。筋肉は衰え、贅肉は蓄えられた。どこか南の国に移住したい。

『同行者大勢』は二十五年かけて、やっと一〇号に至った。次号があるかどうかは、皆さん次第です。

(林)